

第一部・第二部とも、作品・ジャンルごとのまとまりで学びやすい構成になっています。

古文編 第二部

一 随筆

愛づ——虫愛づる姫君 中村桂子……………148

枕草子(清少納言)

木の花は……………156

宮に初めて参りたるころ……………159

二月つごもりごろに……………161

大納言殿参り給ひて……………163

学びを広げる 随筆を書く……………168

瀬戸内寂聴 春を告げる香り……………168

文法から解釈へ⑤ いかにも思ふらむとわびし……………168

——助動詞「む」……………168

二 物語(一)

大鏡

道真と時平……………170

学びを広げる 日本三大怨霊……………170

最後の除目……………177

肝試し……………180

道長と詮子……………184

三 日記

蜻蛉日記(藤原道綱母)

うつろひたる菊……………188

学びを広げる 広がる逸話——『拾遺和歌集』『大鏡』鷹を放つ……………192

和泉式部日記(和泉式部)

夢よりもはかなき世の中を……………194

紫式部日記(紫式部)

秋のけはひ……………197

和泉式部と清少納言……………199

古典の扉 平安時代の文学——女性と仮名……………201

文法から解釈へ④ 見てけりとだに知られむ……………202

——助詞「だに」……………202

四 評論(一)

俊頼髓脳(源俊頼) 香冠折句の歌……………204

無名抄(鴨長明) 深草の里……………206

毎月抄(藤原定家) 心と詞……………208

正徹物語(正徹) 一字の違い……………210

去来抄(向井去来) 行く春を……………213

岩鼻や……………214

学びを広げる 想像の世界を詠む……………214

古典の中に見られる事象と自然科学とを結ぶ、**文理融合**の学びにもつながる導入文です。

近世文学の学びでは、**現代へのつながり**をより感じられるような題材を用意しています。

目次 4

五 物語(二)

源氏物語(紫式部)

物の怪の出現(葵)……………218

学びを広げる 能「葵上」……………218

心づくしの秋風(須磨)……………226

明石の君の苦惱(薄雲)……………230

女三の宮の降嫁(若菜上)……………233

萩の上露(御法)……………237

浮舟と匂宮(浮舟)……………241

参考 源氏物語玉の小櫛 ものあはれ(本居宣長)……………247

古典の扉 広がる源氏物語の世界……………247

六 評論(二)

無名草子 文……………252

風姿花伝(世阿弥) 下手は上手の手下……………252

学びを広げる 世阿弥の言葉……………252

難波土産……………255

玉勝間(本居宣長) 虚実皮膜の間……………255

師の説になづまざる……………258

古典の扉 国学の隆盛……………260

七 近世の文学

西鶴諸国ばなし(井原西鶴) 大晦日は合はぬ算用……………262

学びを広げる 読み比べ——太宰治「貧の意地」曾根崎心中(近松門左衛門) 道行……………268

南総里見八犬伝(曲亭馬琴) 芳流閣の決闘……………272

東海道中膝栗毛(十返舎一九)……………275

参考 近世の多様な文学 桃太郎昔語/刻白爾天文図解/塵劫記……………284

古典の扉 オンライン「図夢歌舞伎」……………284

近松浄瑠璃 湯川秀樹……………287

資料編

古典文法要覧……………292

古文重要語句……………298

古典文学史年表……………300

装束……………(1) 住居・調度……………(2)

陰暦……………(4) 古時刻/古方位ほか……………(5)

官職/位階……………(6) 旧国名・都道府県名対照図……………(7)

京都付近地図/奈良付近地図……………(8) 平安京桑坊図/内裏/大内裏……………(9)

目次 5

NHK大河ドラマの題材になることも発表された『源氏物語』について、関連作品も交えつつじっくりと学べます。

教科書の凡例を提示しています。

この教科書を使うために

単元扉……………単元のねらいと学習目標とを示した。
単元の振り返り……………各単元末には、単元での学習を振り返って確認し、次の学習に生かしていくための振り返りの観点を示した。

各教材の下端には、次の項目を設けた。

- ・ 脚注……………1、2…のように番号をつけ、固有名詞や難解な語句、理解の必要な言葉などを解説した。
- ・ 脚問……………内容理解の手がかりになる箇所には①と番号を付し、問①のように問いを掲げた。
- ・ 語句……………意味や用法に注意し、身につけておきたい語句に*をつけて示した。

各教材の末には、次の項目を設けた。

- 課題……………文章の内容を理解するための手がかりとなる項目と、理解した文章の内容をふまえ、主体的、協働的にその理解をより深めるための活動とを、問いや作業の示唆の形で盛り込んだ。
- 語句と表現……………語句や表現に着目し、語彙力を高めるための問いを設定した。

学びを広げる

……………単元の目標に対応し、言葉の学びを主体的かつ協働的に深め、広げられるような課題を適宜設けた。

古典の扉

……………古典に対する興味や関心を喚起するための発展的内容や解説を示した。

読書の扉

……………読書に親しみ、読書活動を広げる手がかりとして、教材と関連のある書籍を選び、紹介した。

参照ページ行

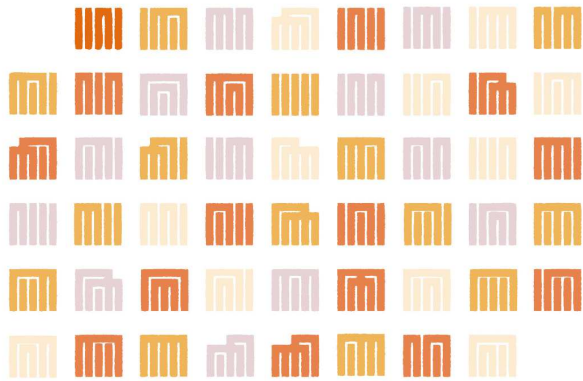
……………「課題」などで教材本文を引用する場合、引用箇所の下に（・）をつけて示した。上の数字がページ、下の数字が行を示す。他教材等を参照する場合（↓ページ）のように示した。



二次元コード……………適宜、二次元コードを付し、リンク先に学習の参考となる情報を掲載した。なお、次のURLからもアクセスできる。
<https://bjqr.ansendo-publio.jp/05-seisenkoren/contents/>

単元扉では教材一覧のほか、**学習のねらいを明示**しています。

五 物語(二)



源氏香 (→247 ページ)

源氏物語 (紫式部)

光源氏の誕生 (桐壺)

藤壺の入内 (桐壺)

北山の垣間見 (若紫)

大鏡

雲林院の菩提講

花山天皇の出家

学びを広げる 『栄花物語』との読み比べ

弓争ひ

三舟の才

古典の扉 「声」を聞く——物語の歴史

- ・ 物語の設定や、構成、展開を理解する
- ・ 登場人物の心情を読み取る
- ・ 同じ題材を扱った物語を読み比べ、物語の多様性について考える



関連ウェブページ・動画などの参照リンクにアクセスできます。

教材本文のページは**シンプルなレイアウト**で、文章の読みに集中しやすくなっています。

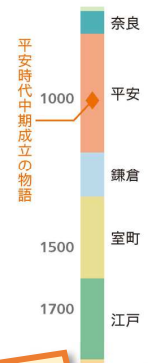
源氏物語

紫式部

物語(二) 72

光源氏の誕生

1 いづれの御時にか、²女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものにおとしめそねみ給ふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心のみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、⁵上人などもあいなく目をそばめつつ、いとまほゆき人の御覚えなり。唐土にも、⁶かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう、天の

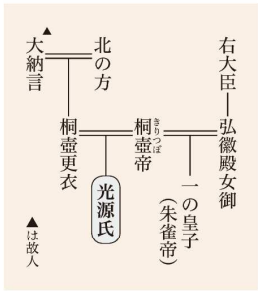


作品の成立時代が一目瞭然の「**成立年代バー**」で、時代背景を踏まえた読解を行えます。

下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心はへのたぐひなきを頼みにて、交じらひ給ふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ古の人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世の覚え華やかなる御方々にもいたう劣らず、何ごとの儀式をももてなし給ひけれど、取り立ててはかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ抛り所なく心細げなり。

9 前の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる児の御容貌なり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづき聞こゆれど、この御にほひには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。はじめよりおしなべての上宮仕へし給ふ



「桐壺」人物関係図

源氏物語 73

- 7 古の人の由あるにて 古風で、教養のある人。
 - 8 後見 後見人。経済的、政治的な後ろ盾。通常は父や兄弟がこれにあたる。
 - 9 前の世 前世。前世の因縁で現世(今生きている世)の運命が決まるという仏教上の考え方があった。
 - 10 いつしかと 早く会ってみたいと。
 - 11 一の皇子 第一皇子。後の朱雀帝。
 - 12 右大臣の女御 右大臣の娘で女御となつた人。ここでは、弘徽殿女御のこと。
 - 13 寄せ重く 後ろ盾がしっかりしている。
 - 14 まうけの君 皇太子。
 - 15 私物 秘蔵の子。
 - 16 上宮仕へ 帝の近くで日常の世話をすること。
- * 語句**
- やむごとなし 際 時めく めざまし
 - え……(打消) あいなし 覚え 悪し
 - あぢきなし はしたなし かたじけなし
 - はかばかし 清らなり
 - (もて) かしづく 聞こゆ

べき際にはあらざりき。覚えいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊びの折々、何ごとにもゆるあることのふしぶしには、まづ参上らせ給ふ、ある時には、大殿籠り過ぐしてやがて候はせ給ひなど、あながちに御前去らずもなさせ給ひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれ給ひてのちは、いと心異に思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この皇子の居給ふべきなめりと、一の皇子の女御は思し疑へり。人よりさきに参り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞなほわづらはしう、心苦しう思ひ聞こえさせ給ひける。

かしこき御蔭をば頼み聞こえながら、おとしめ疵を求め給ふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞし給ふ。御局は桐壺なり。

(桐壺)

課題では、内容理解の問いや、その内容を踏まえた話し合いの課題を設定しています。

効果的な注釈や発問が、スムーズな読解を助けます。

課題

- 一 帝の桐壺更衣への寵愛は、次の人々にどのように受け止められていったか、整理してみよう。
 - ①女御たち（御方々）
 - ②更衣たち
 - ③上達部・上人たち
 - ④世間の人々（天の下）
- 二 帝は「玉の男御子」をどのように思っていたか、「一の皇子」への思いと比較して説明してみよう。

語句と表現

- 一 次の傍線部の助詞を文法的に説明してみよう。
 - ①いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。(72・1)
 - ②はかばかき後見しなければ。(73・6)
 - ③玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。(73・8)
- 二 次の傍線部の助動詞を文法的に説明してみよう。
 - ①わりなくまつはさせ給ふあまりに。(74・1)
 - ②まづ参上らせ給ふ。(74・3)

古典文法についても、**実践的な読解**に活かしていただけるような課題を設定しています。



『源氏物語図屏風』（江戸時代前期）

各单元とも、**文種やジャンルのまとまりによる複数の教材**が配置されています。



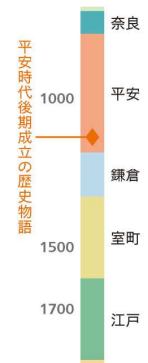
雲林院の菩提講（『大鏡絵詞』 江戸時代前期）

大鏡

雲林院の菩提講

先つころ、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、嬬と行き合ひて、同じ所にゐぬめり。あはれに、同じやうなるものさまかなと見侍りしに、これらうち笑ひ、見かはして言ふやう、「年ごろ、昔の人に對面して、いかで世の中の見聞くことをも聞こえ合はせむ、このただ今の入道殿下の御ありさまをも申し合はせばやと思ふに、あはれにうれしくも会ひ申したるかな。今ぞ心やすく黄泉路もまかるべき。思しきこと言はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける。かかればこそ、昔の人はもの言はまほしくなれば、穴を掘りては言ひ入れ侍りけめとおぼえ侍り。かへすがへすうれしく對面したるかな。さてもいくつにかなり給ひぬ

る。」と言へば、いま一人の翁、「いくつといふこと、さらにおぼえ侍らず。ただし、己は、故太政大臣貞信公、藏人少将と申し折の小舎人童 犬丸ぞかし。ぬしは、その御時の母后の宮の御方の召し使ひ、高名の大宅世継とぞ言ひ侍りしかな。されば、ぬしの御年は、己にはこよなくまきり給へらむかし。自らが小童にてありし時、ぬしは二十五、六ばかりの男にてこそはいませしか。」と言ふれば、世継、「しかしか、さ侍りしことなり。さてもぬしの御名はいかにぞや。」と言ふれば、「太政大臣殿にて元服つかまつりし時、『きむちが姓は何ぞ。』と仰せられしかば、『夏山となむ申す。』と申ししを、やがて、繁樹となむつけさせ給へりし。」など言ふに、いとあさましうなりぬ。



物語(二) 84

大鏡 85

- 1 雲林院 現在の京都市北区紫野にあつた寺。
 - 2 菩提講 極楽往生を願う人々のために、「法華経」を講ずる法会。この法会は一二五（万寿二）年五月のものか。
 - 3 入道殿下 藤原道長（九六六〜一〇二七）。出家したため、「入道」と呼び、摂政であつたので「殿下」という。
 - 4 黄泉路 死後の世界への道。
 - 問① 「思しきこと」とは、具体的にどのようなことを指すか。
 - 5 貞信公 藤原忠平（八八〇〜九四九）。「貞信公」はその諡（死後につける称号）。
 - 6 藏人少将 近衛少将（近衛府の次官）で、五位の藏人を兼ねた人。忠平が藏人少将だったのは八九五（寛平七）年頃。
 - 7 小舎人童 近衛中将・少将などが召し使う少年。
 - 8 母后の宮 皇太后を指す。宇多天皇の母、班子女王（八三三〜九〇〇）のことか。
 - 9 きむち おまえ。対等、または目下の者を親しんで言う。
 - 問② 「いとあさましうなりぬ」とは誰の思いか。
- *語句**
詣づ こよなし うたてげなり
心やすし まかる 思し おぼゆ
さらに……(打消) ぬし います
つかまつる 仰す やがて あさまし

課題

- 一 「すかし申し給ひけむ」（89・8）とあるが、道兼はなぜそのような行動をとったか、話し合ってみよう。
- 二 兼家が道兼のためにとった行動をまとめ、なぜそのようにしたか、話し合ってみよう。
- 三 花山天皇と道兼の会話に注意して、二人がそれぞれどのような人物として描かれているか、まとめてみよう。

語句と表現

- 一 次の表現にはどのような違いがあるか、傍線部に注意して説明してみよう。
 - ① 神璽・宝剣渡り給ひぬるには。（87・9）
 - ② 春宮の御方に渡し奉り給ひてければ、（87・11）
- 二 次の傍線部の助動詞は、帝のどのような気持ちを表現しているか、その効果を説明してみよう。
 - ① 顕証にこそありけれ。（87・7）
 - ② わが出家は成就するなりけり。（88・1）

学びを広げる

『栄花物語』との読み比べ

次の文章は、『大鏡』の「花山天皇の出家」と同じ場面を描いた『栄花物語』の一部である。よく読んで、後の課題に取り組んでみよう。

「学びを広げる」には、別時代・別ジャンルの関連文章との読み比べなど、**言語活動を中心とした教材**が配置されています。

1 この御心のあやしう尊き折多く、心のどかならぬ御気色を太政大臣思し嘆き、御叔父の中納言も人知れずただ胸つぶれてのみ思さるべし。

4 説経を常に花山の敵久阿闍梨を召しつつかせ給ふ。御心のうちの道心限りなくおはします。「妻子珍宝及王位」といふことを、御口の端かけさせ給へるも、惟成の弁、いみじうらうたきものにつかはせ給ふも、中納言も

るとともに、「この御道心こそうしろめたけれ。出家入道もみな例のことなれど、これはいかにぞやある、御心さまの折々出で来るは、ことごととならじ。ただ冷泉院の御物の怪のせさせ給ふなるべし。」など嘆き申しわたる

ほどに、なほあやしう例ならず、ものすずろはしげにのみおはします。中納言なども御宿直がちに仕うまつり給ふほどに、寛和二年六月二十二日の夜、にはかに失せさせ給ひぬとのしる。

内裏のそこの殿上人、上達部、あやしの衛士、仕丁に至るまで、残るところなく火を灯して、至らぬ限なく求め奉るに、ゆめにおはします。太政大臣よりはじめ、諸卿、殿上人残らず参り集まりて、壺々をさへ見奉

るに、いつこにかはおはします。あさまじういみじうて、一天下ごぞりて、夜のうちに閑々固めのしる。

1 この御心 花山天皇の、出家を願うお心。
2 太政大臣 藤原頼忠（九二四〜九八九）。
3 御叔父の中納言 藤原義懐（九五七〜一〇〇八）。

4 説経 経文を講じ説くこと。

5 花山 花山寺。（↓87ページ注4）

6 敵久阿闍梨 「阿闍梨」は高僧の尊称。

7 妻子珍宝及王位 「大方等大集経」の一節。「妻子珍宝及王位、臨命終時無隨

者」とある。妻子や財宝、王位などはこの世を去るときに従って来ないという意味。

8 惟成の弁 藤原惟成（九五三〜九八九）。「弁」は大政官の役人。

9 冷泉院の御物の怪 花山天皇の父である冷泉院（九五〇〜一〇一一）にとりついていた物の怪。

10 衛士 諸国から選抜した宮中警護の兵士。主殿寮に属し雑役にあたる者。

11 仕丁 三位以上の官人。

12 諸卿 「卿」は大納言、中納言、参議、三位以上の官人。

13 壺々 殿舎と殿舎の間の小庭。

14 閑々 鈴鹿、不破、逢坂の各関所。

紙面では**図版や写真**を豊富に掲載し、古典世界に効果的に触れていきます。



江戸時代の瓦版（『肥後国海中の怪（アマビエの図）』）



江戸の名所を並べた双六（『新撰工夫双六』）

参考 近世の多様な文学

279

籍、往来物と呼ばれる教科書、名所案内や新聞、魔除けの絵等々。あらゆる印刷物が出版され、今と変わらない豊かな出版文化があったのである。その一端を、実際に眺めてみよう。

古典の扉
「声」を聞く——物語の歴史

「物語」には「声」がある。
仮名散文によって書きつづられた物語は、語り手によって聞き手に語り聞かせる趣で書かれているからだ。
今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。……あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。……手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嬬に預けて養はず。（『竹取物語』）

『竹取物語』は、竹の中の「三寸ばかりなる人」を発見する不思議な場面から始まる。耳をすますと、文末表現は「けり」からしだいに現在形に変わっていき、「聞き手」は知らないうちに物語の世界に入り込んで、目の前にできごとを見て感じるようになる。さらに耳を傾けると、物語にはため息、昂揚、時には批評など、語るできごとに対する架空の語り手の言葉が聞こえてくる。

上達部、上人などもあいなく目をそばめつつ、いとまばゆき人の御覧えなり。（『源氏物語』光源氏の誕生）
語り手は、帝の桐壺更衣への寵愛に目を背ける上達部、殿上人の態度を「あいなし（筋違いにも）」と批判する。読者はそんな「声」に導かれ、自らできごとを批評し始める。

物語（二） 98

『竹取物語』の作り物語の虚構性と十世紀に登場した『伊勢物語』などの歌物語の抒情性、『蜻蛉日記』に始まる女流日記文学の内面性が結実した作品が十二世紀初め成立の『源氏物語』だ。この物語ではしばしば語り手の「声」が事の真相や意味を問うが、そこに作品世界を相対化する批評性も生まれてきた。

その後十一〜十二世紀には歴史物語が新生面を切り開いた。『大鏡』は藤原道長の栄華を主題とするが、作者は冒頭において、百八十歳を超える老翁二人が見聞した「歴史」を語る「語り」の場を虚構する。複数の「声」を響かせることで、政治の裏側までも描き出して「歴史」への批判性を獲得したのである。

「声」の歴史は続く。鎌倉時代には軍記物語が登場するが、『平家物語』には琵琶法師の「声」によって生き生きと時代を語る「平曲」の息づかいが今に残る。「物語」は耳を傾けて読みたい。

単元の振り返り

- 物語の設定や、構成、展開を理解し、登場人物の心情を的確に読み取ることができたか
- 読み比べをとおして、物語の多様性について考えを深めることができたか
- 物語への関心を深め、さらなる学びへの意欲をもてたか

単元ごとに振り返り項目を明示。観点別評価にもつながります。

学びを広げる

古典作品の翻案を読む

古典の作品を独自の世界観で再生させる試みは古くからある。物語としてだけでなく、ある時は芸能として、またある時はパロディとして、さまざまなジャンルにわたり、数多くの作品が創作されている。次の文章は、業平を語り手として『伊勢物語』を翻案した小説の一部である。

『小説伊勢物語 業平』より

高樹のぶ子

恋人を失って思い屈した果てに、東国への下向を決意した業平は、三河の国郡司の館で、筒井の周りで遊ぶ童たちを目にする。筒井の記憶を呼び覚ました業平は「筒井は童の遊ぶところのみならず、恋の行くえにも関わる話しが……。」と、旅のつれづれに語り始める。同行の供人「恵明」「元親」、僧「覚行」も杯を手に耳を傾ける。

5

話し終えて業平、呟くのでした。

「……いかに幼きころより良く知り、心通う仲であっても、男は他の女に懸想してしまうもの。それでも優れた心根の女の元へ、男はついに戻るもののように。」
確かにそのようで、と頷きつつも覚行は、

学びを広げる

能「葵上」

能には『源氏物語』を題材にした演目が多くある。次に示した「葵上」はその一つである。どのような作品か調べ、『源氏物語』との共通点や相違点を整理してみよう。

登場人物		能の役割	
シテ	主人公	シテ方・ワキ方・囃子方・狂言方	
ツレ	シテの助演者		
ワキ	主人公の相手役		
ワキツレ	ワキの助演者		
アイ（狂言方）	進行役		
	上臈姿の六条御息所（生き霊）		
	鬼相の六条御息所（生き霊）		
	霊を導く照日の巫女		
	霊と戦う横川の小型（行者）		
	朱雀院の臣下		
	左大臣家の従者		

*シテ方には、演者の他に音唱を担う「地謡」、舞台上の補佐役「後見」がいる。

左大臣邸。葵の上にとりつく物の怪の正体を明らかにするため、梓の呪法を使う照日の巫女が朱雀院の臣下に呼び出される。梓弓の弦の音に引かれて生き霊（前シテ）が現れ、やるせない思いを述べ、六条御息所であると名乗る。生き霊は葵の上への恨みを語るうち心が高ぶり、激しい嫉妬で葵の上を打ち据える。

シテ あら恨めしや、今は打たではかなひ候ふまじ。
この女を打ち据えずにはいられません。

ツレ あらあさましや六条の、御息所ほどの御身にて、後妻打ちの御振る舞ひ、いかに
六条御息所ほどの（身分で）
できること候ふべき。ただ思し召しとまり給へ。
1 後妻打ち 離縁された前妻が後妻にいやがらせをする習俗。

5

多様なジャンルのテキストを取り上げ、古典の読み取りをさらに深めます。

コラム「古典の扉」では、**古典と現代とのつながり**などを紹介しています。

古典の扉 オンライン「凶夢歌舞伎」

コロナ禍に見舞われた今年（二〇二〇年）は、ネットやSNSで映像を配信する「オンライン演劇」が誕生した。中でも異彩を放ったのが歌舞伎のオリジナル作品「凶夢歌舞伎」だ。

創作の中心となった松本幸四郎と市川猿之助が、配信作品の意義や手応えを語った。

——最初の凶夢歌舞伎「忠臣蔵」の手応えは。どんな反響がありましたか。

幸四郎 一番耳に入るのは、相手役の目線だったりする撮り方がおもしろかったと。歌舞伎演出のお芝居が映像作品としても成立し得ると思いました。

——二作目に「弥次喜多」をやるのは？

猿之助 「弥次喜多」は毎年八月に新作を生み出していた。今年は歌舞伎座が再開する月だったので、できなかった。なんとかして続けたいなあと思つてたんです。そこに凶夢がうまく合わさった。

撮影は本番の舞台が終わった後に。歌舞伎に携わつてる人が作つてますから。映画に詳しいのは藤森（圭太郎）監督とカメラ

マンぐらい。幸四郎さんに僕、（市川）中車さんと映像作品に出てる人がいたからできた。

——今回の「弥次喜多」は、原作に舞台「狭き門より入れ」（二〇〇九年）を使いました。猿之助さんにとっては初めての現代劇でもありましたね。

猿 絵空事としても、あまりにも内容が現実とかけ離れすぎて、あのころはお客も「そんなことねえだろ、世界に疫病が。」つて感じでしたよ。それがほんとになつちやつた。今回は笑いもありつつ、見る人がちよつと背筋がぶるつとくるようなつくりにしたかった。

——演劇的に新しく出てきた作品という感じがします。どんな印象ですか。

幸 歌舞伎は受け継がれていく伝統や歴史がありますけれども、演劇として現代に存在する場所があつてこそ価値がある。配信のドラマはいま誕生したわけではありませんが、当然そこには歌舞伎のソフトもあるべきだと思います。

猿 コロナのようなことは二度とあつてほしくないけれども、その中でこういうものも生まれました。それは文明の繰り返しを見てりゃあ、危機とかになれば、人間はどんな新たな努力をしていくんだな。

コラム「文法から解釈へ」では具体表現をもとに、文法を**活用的**に読み解きます。

文法から解釈へ

▼ 落人 帰り来たり —— 待遇表現の変化

源義仲上洛の報に接し平家一門は都落ちするが、薩摩守平忠度はどこからか引き返し、和歌の師と仰ぐ藤原俊成の邸を訪れた。その時の邸内の人々の言葉が「落人帰り来たり」である。

つい先頃まで平家一門は絶大な栄華を誇り、忠度は従四位上の殿上人であつたのだから、「薩摩守帰り給へり」とあるべきところである。それが「薩摩守」ではなく「落人」、「帰り給へり」ではなく「帰り来たり」となつていいる。ここには邸内の人々の困惑と冷徹な思惑が読み取れる。

都落ちに際して平家一門は六波羅の邸宅に火を放ち、平安京の治安は大いに乱れた。九条兼実の日記『玉葉』の八月六日の記述にも「京中、物取追捕、兼日二倍増え、天下已二滅亡シ了ヌ」と記されている。俊成邸の人々が狼狽したのも無理はない。さらに言えば、平家の後にやってくる源氏が後白河法皇の平家追討の院宣を受けるであろうことは明らかであり、そうなつた時に平家の中心人物の一人である忠度と親交を結び、都落ちに際してもならんかの関わりがあつたとみられることは、今後のためにも避けたいことであつたに違いない。そういう思いが「落人帰り来たり」という短い言葉には表れているのである。

軍記 120

そこで忠度はどうしたか。物語には「薩摩守馬より下り、みづから高らかにたまひけるは」とある。これまでであれば、自らは馬上にあつて従者に取り次ぎを請わせるところであつたらう。

しかし今は状況が違う。「落人帰り来たり」という言葉を無礼だと言える立場にはなく、それ以上に忠度には伝えなければならぬ思いがあつた。それを自覚していればこそ、忠度は「馬より下り」、「みづから高らかに」名のつたのである。「別の子細候はず」とは、俊成に危害を加えるつもりも迷惑をかけるつもりもない、という意思表示である。もはや「落人」と呼ばれる自分、「帰り来たり」と言われる自分であるが、それでも願わずにはいられないことが一つだけある。ただ一首でもよい、自分の歌を勅撰集に選んでもらえるならば。人々の声が冷徹であればあるだけ、忠度の思いの切実さが際だつたのである。

単元の振り返り

- 登場人物の行動と心情を的確に読み取ることができたか
- 『平家物語』の受容の意義について考えを深めることができたか
- 軍記への関心を深め、さらなる学びへの意欲をもてたか

